

「セクシャリティ」を考えるⅡ

～「恋愛」という日本語をめぐって～

シンキング・バーズ
日本語研究班

「セクシャリティ」を 幸福へと導く階段として

日 本語の「恋愛」は、一般的には男女間の思慕の感情を指して使われます。その「恋愛」は、一定の年齢を重ねているような場合は、過去の経験への懐かしさだったり、ほろ苦い思い出だったり、恥じ入りたくなるような情感だったりするかもしれません。また、「恋愛」を経験していない若い人たちの場合は、ドラマやマンガ、小説などに描かれた情景のような、夢や憧れ、期待や不安だったりするかもしれません。そして、まさに恋愛中の人たちの場合は、相思相愛の喜びだったり、会えない時の寂しさや辛さだったり、片思いの苦しきさだったりするかもしれません。「恋愛」という感情は、甘く切なく、苦しくもあり、激しくもあるような、思慕の念に彩られています。ここでは、「セクシャリティ」という観点から、「恋愛」という日本語について考えてみます。

●単語としての「恋愛」

世 界には、恋愛模様を題材にしたさまざまな文化的な作品が残されています。演劇、音楽、絵画、詩、小説、映画、テレビドラマ、マンガなど、その範囲は多岐にわたります。その描かれ方も多様で、悲劇的なものから喜劇じみたものまで、さまざまです。

「恋愛」という感情は、極めて個人的なものです。たぶん、恋愛感情を誰かと共有することは難しく、相思相愛のヒト



同士でも、その感情を共有しているかとなると、疑問符が付きます。相手の感情を察することはできたとしても、同じ気持ちかどうかは、分からないと言わざるを得ないのです。多くの文化的な作品は、その感情のすれちがいや起伏、想いが伝わらないことの辛さや伝わったと思える時の喜びなどを、表現していることが多いと言えます。

その個人的な感情としての「恋愛」は、まちがいなく「セクシャリティ」の一要素です。「恋愛」の様態は、男女間とは限りませんが、レスビアンやゲイといった同性愛を含めて、性的な心模様「恋愛」という日本語をあてるのが一般的です。いずれにしても、それは、個人的な感情です。

「恋愛」の形はさまざまです。成り行きや経過、その結末もさまざまです。ただ、「恋愛」という感情自体は恐らく、強弱はあったとしても、人々の内面で近似形をしていると思われます。だからこそ、「恋愛」という単語があるのです。

ボクたちがここで取り組もうとしているのは、いわゆる恋愛論ではありません。恋愛論は一般的に、個人的な恋愛体験や恋愛の在り方(良い恋愛/悪い恋愛)、恋愛作法や恋愛術のような記述が多いと認識しています。そうではなく、「恋愛」とい単語自体

へのアプローチです。個人的な感情を指す「恋愛」という単語自体は、一定の社会性を持っています。「セクシャリティ」の一要素としてある「恋愛」へのアプローチは、「恋愛」という単語が意味するところの気持ちや、「恋愛」という単語を通して、人々の間でどのように共有され、どのように取り扱われて来たのかへのアプローチと言えます。

●「恋愛」の初出を検証する

ボクたちが、「恋愛」という日本語に焦点を当てるのは、二つの背景があります。一つは時代的な背景、二つ目は国民性のような背景です。時代的な背景とは、明治期以降の日本の恋愛観の推移と時代との関連性です。国民性とは、日本語が持つニュアンスのことで、「恋愛」という単語によって定着し、共有されている日本的な恋愛観です。つまり、「セクシャリティ」の一要素になる「恋愛」は、日本では、どう意味変化し、または、変化しなかったかを、社会的背景を加味しながら、検証しようとするのです。

「恋愛」という単語は、近代日本語の形成過程で使われ始めたと考えられます。古和語では「恋（こひ）」に相当し、「恋焦がれること」「恋慕ふこと」に類似した意味と言えます。その意味で「恋愛（れんあい）」と音読する漢字熟語は、近代的です。

日本語における「恋愛」の初出の特定は、かなり難しいことは確かです。ボクたちは、国立国語研究所が提供している全文検索システム「ひまわり」を利用させて頂き、提供データの検証を試みることにしました。対象とした文献データは、『明六雑誌』『国民之友』『女学雑誌』『女学世界』『婦人倶楽部』『青空文庫』です。その結果、『青空文庫』以外の文献データでの「恋愛（恋愛）」

の初出は、以下の通りでした。

【明六雑誌】

明治7年（1874年）6月刊行の第13号に、加藤弘之（1836-1916）が著した「米國政教 第六號の續き」と題する寄稿です。トムソンという人物が書いた文章の訳文とされています。

内容は、アメリカにおける権利（特に自由権）についてで、一夫一婦制を基本とした結婚制度に触れた箇所、「恋愛」が使われています。

一方には自由**恋愛**黨 夫婦共時々**恋愛**する所の變ずるに隨て縦に配偶を改るを以て眞の自由となせる一黨あり

これは、アメリカ的な一夫一婦制に異を唱える一党が、同国内にはいるという記述です。アメリカ政府は、このような「自由恋愛」や配偶者との離婚／再婚、また一夫多妻の提唱を「悪風俗」とみなし、禁止する憲法を定めたとしています。

この「恋愛」は、原典を参照できないので確証は持てませんが、恐らく“love”の対訳語と推察されます。しかも、男女間に限定された“love”で、とてもアクティブです。秘めた思い（恋）のように内面的ではなく、「自由」を求める感情の一つという意味で、アメリカ的と言えます。「恋愛」が表す意味の一つの原型なのかもしれません。

【国民之友】

明治20年（1887年）刊行の第3号に、筆者不詳で掲載された「在野の志士に望む所あり」と題する一文です。

内容は、政治についてで、「恋愛」模様とは無関係です。明治23年（1890年）に日本初の国会開設を控え、かつての自由民権運動のような政治への関心が、「在野」の人々の間で薄れていると憂えています。そ

の上で、政治への関心を鼓舞する提案をしていて、文末の結びに、婚約中の男女の感情のすれちがいになぞらえて、皮肉を込めた比喩として「戀愛」を使っています。

嗟呼在野黨の人々よ、卿は嘗て**戀愛**の熱火に責められて、彼の處女（國會）の爲めには、身も魂も献せんと迄、誓ひたるにあらずや、而して今や結婚の約既に整ひ、卿の愛する新婦は、既に燭を乗て中門の外に立てり、然るに新郎たる卿は却て堂上に熟睡し、之を歓迎するの用意だに爲さざるは何ぞ乎、嗟呼薄情なる新郎よ、嗟呼可憐なる新婦よ、

国会を新婦に、在野の人々を新郎になぞらえたこの記述は、かつて「戀愛」の熱火に責め立てられるように、国会開設（結婚）を熱望したものを、いざ婚約が整ってしまうと、新婦が結婚準備に迫られているというのに、新郎は準備もせず眠ってばかりいるという皮肉です。ここでの「戀愛」は、男性の感情と言え、女性に対する情熱的な求愛感情を指しています。

【女学雑誌】

明治27年（1894年）刊行の第27号に、江東居士なるペンネームで執筆された「時艱憶烈女」と題する論説です。

内容は、男女の役割論（ジェンダー論）で、筆者（男性）が中流以上とした女性たちの風紀に対する、違和感に根差した批判です。東京近郊に暮らす限定的範囲の女性像と思われませんが、ある外国人学者が欧米の結婚事情について述べたという雑感に、「戀愛」の訳語を当てています。

エドワードカアペンタアーなる學者は、歐米今日の男女間の愛情結婚等を慨嘆して、今の世には眞の**戀愛**なし、在る所は、

商業的結婚（コンマーシアルマリエージ）なりと云へり。言辞矯激なりと、雖ども移して以て上述の如き、婦人を評すべし、寄語をよす、滿天下の操（みさを）正しき同胞姉妹よ、余輩は切に望む、願はくは、今日の時世に鑑み、天の婦人に命ずる職責を重んじ、時流を抜いて、卓然自立せよ。

ここで言う「眞の戀愛」なるものがどういうものなのかは、分かりません。しかし、「商業的結婚」と言っているのですから、金銭が結婚への影響力を強めたと理解できます。結婚は、気持ちよりお金が優先という気風なのでしょうか。裏返すと「眞の戀愛」は、金銭に左右されない純真な気持ちということで、一つの美德とみなせます。ちなみに、著者が「上述の如き」とした当時の日本の女性像は、以下の通りです。

見よ、彼等の服装は如何に陋巷の藝妓然たるよ、彼等らの來賓に接する如何に横柄なるよ、如何に演劇に狂するよ、如何に夏期旅行に忙がはしきよ。如何に救貧の念に乏しきよ、黒漆の人力車、金色の指輪の彩色爛然たる外、彼等の肉體精神より發する光輝は燕石にも値せざるべし。而して怡々として悦こび、嬉き嬉きとして笑ひ、たまたま、貞婉秋花の如く、凜烈松栢の如き婦人を視れば、古風と稱し、野暮と稱し、田舎臭しと誹り、恰かも流行後れの夏帽子するに至る。従つて内行の稱すべきなく、婦道の見べきなし。嗚呼薄弱、此くの如ごとき婦人、安んぞ、能く良人の事業と決心とを現在未來に助くることを得えん、徒らに良人の事を誤まり、財を糜（なみし）、名を汚すのみ。

要するに、女性たちの風紀を称して「藝妓然（芸者まがい）」とし、享樂的で、見栄っ張り、横柄だとする、ある意味では典型的な女性風紀に対する批判です。そこに「恋(戀)愛」の文字はありません。このような女性像は、当時の女性的な「セクシャリティ」の一断面と言えます。その社会的断面に対する風紀批判は、内容こそちがえ、その後も脈々とあり続け、現在も残っています。当時の女性たちが、その論調をどのように受け止めたかは分かりません。

●北村透谷における「恋愛」

こまでの文献データは、特定の雑誌に掲載された文章データです。各雑誌の発行趣旨に制約される側面や執筆者が限られているという側面では、広範な文献データとは言えません。ただ、「戀愛」という単語は、明治時代初頭には、恐らく英語“love”の訳語として使われ始め、男女間の性的欲求感情を表していたことが分かります。そして、「戀愛」が意味するところの感情に対する良否の判断は、文脈や著者の倫理観などでちがっていたと、とりあえずはみなせます。

これから検証するのは、『青空文庫』に収められた文献データです。小説を中心にしたデータですが、著者は多岐にわたり、文章形態も一様ではありません。時代は、明治期から昭和期に及び、時代に応じた「恋愛」のニュアンスが検証できるかもしれません。まずは、明治時代の検証からです。

最初に取り上げるのは、北村透谷（1868-94）が著した「厭世詩家と女性」という論考です。明治25年（1892年）2月に、『女学雑誌』303号と305号に2回に分けて掲載されました。冒頭は、次のように始まっています。

恋愛は人世の秘鑰（ひやく）なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抽（ぬ）き去りたらむには人生何の色味かあらむ、然るに尤も多く人世を覩じ、尤も多く人世の秘奥を究むるといふ詩人なる怪物の尤も多く恋愛に罪業を作るは、抑（そ）も如何いかなる理（ことわり）ぞ。

冒頭部分でも分かるように、この論考は、北村透谷による恋愛論です。当時の世相として、男女間のいわゆる「色恋」を酷評する論者がいて、その論者たちを称して「厭世詩家（世の風潮を憂いて嘆く論者）」と呼んだ透谷は、「色恋」の心情に「恋愛」を当て、「厭世詩家」批判を展開しています。この論考は、恋愛賛美論です。約6,500字（400字詰め16~17枚程度）の論考中で、透谷は「恋愛」を44回用い、そこに「色恋(劣情)」とは異なるニュアンスを持たせようとしています。以下のような記述に、それが現われています。

幼な心に既に恋愛の何物なるかを想像することも、皆な是（これ）人生の順序にして、正当に恋愛するは正当に世を辞し去ると同一の大法なる可けれ。恋愛によりて人は理想の聚合を得、婚姻によりて想界より実界に擒せられ、死によりて実界と物質界とを脱離す。抑（そ）も恋愛の始めは自らの意匠を愛する者にして、相手なる女性は仮物（かりもの）なれば、好しや其愛情益発達するとも遂には狂愛より静愛に移るの時期ある可し

ここでの透谷の論理展開は、誕生から死に至る誰も避けて通れない人生プロセスにおいて、生氣盛んな時期に男女が互いに求め合い、婚姻することは、自然の摂理というものです。その求め合う心を指して「恋

愛」を用い、その先にある婚姻を通じて「実界（世間）」を知り、大人に成長するとしています。そして、「恋愛」は、「狂愛」から「静愛」に変わる時期が来るというのです。「静愛」とは、穏やかな愛（平和、円満を望む心）と推察されます。そのように、人生プロセスで重要な役割を果たす「恋愛」を、いたずらに「罪業」扱いにすることは何事か、というのが透谷の主張です。ちなみに「平和／円満」は、武勇を貴ぶ論者には、男児を低落させる論と映ったと思われま

しかし、ここには現代に通じる恋愛観があります。「恋愛」は、単なる欲情ではなく、互いの実情を知って行く心情だということですから、低劣とされた「色恋」とは異なることとなります。神聖な心情というニュアンスを加味して、「恋愛」としたと言えます。

●夏目漱石と森鷗外

北 村透谷の主張が契機となったかどうかは分かりませんが、明治時代後期の日本の文壇は、いわゆる恋愛小説ブームになったと推察されます。そのブームを称して正岡子規（1867－1902）は、「恋愛小説のみ持囃（もてはや）さるる（明治35年／「病牀六尺」より）」と書いています。「恋愛」は、当時の小説界の一大素材になったことが伺えます。ということは、「恋愛」は、辟易するような鬱陶しさと、穢れのない純真な心という認識の間に立たされ、聖俗を合わせ持ちながら、男女が惹かれ合う心情を表す日本語になったということです。逆に言えば、聖俗の二面性を表すからこそ、浮世小説にはうってつけだったのかもしれませんが。

二葉亭四迷（1864－1909）は、明治39年（1906年）10月刊行の『女学世界』に、「未亡人と人道問題」と題する雑記を掲載しています。内容は、ある軍人の未亡人と大学

教授との不倫の恋を素材に、小説を書こうと思ったというものです。日露戦争で夫を亡くした未亡人を哀れんだある大学教授が、再婚を勧めて縁談を持ち掛けたところ、教授と未亡人が「恋愛」してしまい、姦通したという巷間譚です。敬虔なキリスト教信者の未亡人と既婚の大学教授とのこの不倫話に、四迷は、戦争未亡人は多いとして、教授夫人より未亡人に同情を寄せています。そして、戦争未亡人の再婚問題は、人道問題だとしています。「恋愛」による姦通を「大罪」としながら、それは戦争の結果で、未亡人女性は戦争被害者だとしている訳です。

このように「恋愛」は、一種の心的真性のような、「色恋」とは微妙に異なるニュアンスを加味しながら、日本語に組み込まれて行ったと言えます。そこで、明治時代後期の小説界を牽引した夏目漱石（1867－1916）と森鷗外（1862－1922）における「恋愛」を取り上げます。

夏目漱石の小説の中で、「恋愛」という単語が使われるようになったのは、データ検索の結果では、明治40年（1907年）1月に発表された『野分』（雑誌『ホトトギス』掲載）以降です。『野分』は、いわゆる恋愛小説ではありませんが、当時の男性の恋愛観に言及したカ所があります。

『野分』の主要な登場人物は3人です。白井道也先生（大学卒業後、地方の中学校教師に赴任するが、地元から疎まれ、新潟、九州、中国地方と転々とした末、東京に戻って貧窮の文士になった）、高柳君（地方出身の大学卒業間もない若者で、職も決まらず、翻訳などを手掛けながら食いつないでいる。母親一人を田舎に残し、将来を悲観的に見る性癖がある。結核を患っている）、中野君（高柳君の大学の同級生で、東京の裕福な家庭の子息。高柳君を西洋料理店や音楽会などにたびたび誘う。良家の令嬢と

交友して結婚する)。いずれも大学卒の当時の知識人で、中野君だけが経済的に恵まれています。小説の全体的な話題は、知識力を活かした生き方と経済力の整合性についてで、知識はあっても経済力がない知識人の生活模様と心模様が描かれています。

その3人の中で「恋愛」に関わっているのは、中野君だけです。

近頃はあまり恋愛呼ばりをするのを人が遠慮するようであるが、この種の煩悶は大いなる事実であって、事実の前にはいかなるものも頭を下げねばならぬ

これは、白井先生が雑誌記事の取材のため、中野君を訪ねた時の中野君のセリフとして書かれています。中野君にとって「恋愛」は、良家の令嬢と交際するために、大切なことのひとつなのです。しかし、『野分』の中で漱石は、次のように書いています。

愛はもっとも真面目なる遊戯である。遊戯なるが故に絶体絶命の時には必ず姿を隠す。愛に戯むる余裕のある人は至幸である。

これは恐らく、漱石の恋愛観と言える記述です。「真面目なる遊戯」である以上、「余裕（経済力）」が必要で、その上に「愛」は成り立つというのです。子供の「ごっこ遊び（ゲーム）」の延長線上に「恋愛」はあり、成長した青年層の戯れで、非常時には「恋愛」どころではないという訳です。だから、恵まれた家庭にいる中野君だけが、「恋愛」のウンチクを語れると読めます。お金に困っている白井先生と高柳君は、「恋愛」に関心を持ってないのです。既婚の白井先生の妻は、甲斐性のない夫を愚痴るばかりです。つまり、「恋愛」は、上層の若者たちによる

高級遊戯のようなニュアンスになります。若い男女の高級嗜好品ということです。

この漱石による恋愛観を踏まえて、次に検証するのは、森鷗外の『キタ・セクスアリス』です。この作品は、漱石の『野分』から2年後の明治42年（1909年）に、『スバル』7号に掲載されました。正式な作品名は、ラテン語で“VITA SEXUALIS（性的経歴）”と作品末に記されています。日本人には、意味不明なタイトルだったと思われる。カタカナ表記の「キ」は、「ウイ」と読ませています。作品の公表後、掲載誌は発禁処分になっています。

『キタ・セクスアリス』は、哲学者の金井湛（しずか）という主人公が、幼少期から青年期に体験した出来事の回想譚のような作品です。一種の「青春グラフィティ」と言え、鷗外自身の体験を元にしてしていると思われ。『セクスアリス（性の／男女の）』というタイトルですが、金井自身は「性」に無関心な男のように描かれていて、周囲の男たちの性的言動（性欲）を、観察記録のように描いた作品です。現代の感覚からすると、発禁処分になるような内容ではありません。

この作品で鷗外が「性欲」としているのは、主に若い男性にありがちな女性を求めようとする性向のことです。特定の女性への「愛」というより、女性への好奇心、あるいは、女性との触れ合い願望のような、男性的な生理を指していると言えます。寮生活をしている10代男子学生たちが、「硬派」と「軟派」に分かれ、「軟派」が、いわゆる女遊びに関心を寄せるような傾向です。その女遊びへの関心は、「性欲」であって、「恋愛」ではないというのが鷗外の認識です。漱石が「真面目なる遊戯」とした情動は、鷗外では「性欲」なのです。

作品の冒頭で鷗外は、女湯の覗き見癖が

ある出歯亀という男が、湯から出て来た女性を尾行し、暴行を加えたというストーカー事件について、その大々的な報道によって「出歯亀主義という自然主義の別名が出来る」と書いています。自然主義が出歯亀の覗き見癖と大差なく低俗とみなされるのは、事件を報じる側も、低俗癖におもねっているためと見ているのかもしれませんが。

恋愛は、よしや性欲と密接な関繋（かんけい）を有しているとしても、性欲と同一ではない。

これが、『キタ・セクスアリス』における鴎外の恋愛観と言えます。この恋愛観に従うと、若い「軟派」の男たちを突き動かす「性欲」は、ほとんど動物的な衝動になってしまいます。悪ふざけに近い猥談、色本への好奇心、寄宿生からの同性愛（ゲイ）めいた誘い、女給がいる店への出入り、遊郭からの誘惑と、若い男たちは、ある意味では自らの「性欲」に振り回されるように、若い時代を過ごします。そして、そのうちの幾人かは、良い表現ではないとしても、巷間の女性に捕まり、落第・退学の道を行って行きます。ここに描かれている「性欲」は、若い男の身を滅ぼしかねない情動と言えます。若い男にとって「性欲」は、ある意味では危険な情動なのです。

「恋愛」は、そういうものとはちがうと鴎外は述べています。

恋愛を離れた性欲には、情熱のありようがない

鴎外がイメージしている「恋愛」は、相手を求めるというより、思いやるというニュアンスが強く、「美しい」のです。「性欲」は、時に衝動的で激しく、「醜く」もあるの

に対して、「恋愛」は、ほのかに甘く香るような穏やかな「幸福」のニュアンスがあるとしているのかもしれませんが。

「恋愛は、美しい」

これは、現代日本語にも通じるニュアンスです。「恋愛」は、色情狂の曲がごとではないし、猥雑な好奇心でも、からかい半分のお遊戯でもない。もっと静かな情熱、相手を想う心、そういう心の状態を指して、「恋愛」という日本語を使いたいと示唆している気がします。日本語における「恋愛」の清楚さのニュアンスは、森鷗外に起因するのかもしれない、とボクたちは考えます。

●与謝野晶子と岡本かの子

ここまで述べて来たのは、男性による「恋愛」の使用例です。「恋愛」は、男性著述家が使い始めた日本語なのはほぼ確実ですが、後に女性著述家に広がって行きました。では、女性著述家は「恋愛」を、どのような意味で使用し、どのようにみなしたのか。それが、次の課題になります。

まず取り上げるのは、与謝野晶子（1878－1942）における「恋愛」です。その初出は、『青空文庫』のデータ検索の結果では、歌集『みだれ髪』の冒頭部分です。明治34年（1901年）の発行ですから、漱石や鴎外に先駆けて使用しています。しかし、和歌の中での「恋愛」の使用はありません。

この書の体裁は悉く藤島武二先生の意匠に成れり 表紙画みだれ髪の輪郭は**恋愛**の矢のハートを射たるにて矢の根より吹き出でたる花は詩を意味せるなり

「恋愛の矢」にハートを射抜かれ、その矢の根元から吹き出すように咲いた花が、

In My Life

この歌集だとしています。「恋愛の矢」は、射手がいてこそ放たれます。その射手に対して咲いた花だとしても、ハートに咲いた詩は、美しいというより、時に艶めかしく、時に狂おしく、時に毒々しくもあります。和歌には、「恋」が多用されています。

やは肌の あつき血汐にふれも見で さ
びしからずや 道を説く君

恋か血か 牡丹に尽きし春のおもひ と
のゐの宵の ひとり歌なき

友は二十（はたち） ふたつこしたる我
身なり ふさはずあらじ 恋と伝へむ

恋の神に むくいまつりし今日の歌 忽
にしの神は いつ受けまさむ

くろ髪の 千すぢの髪のみだれ髪 かつ
おもひみだれ おもひみだるる

人の子の 恋をもとむる唇に 毒ある蜜
を われぬらむ願ひ

これらの和歌は、ボクとしてはただただ恐ろしいと感じられるので、その解説をここで試みるつもりはありません。和歌という詩形態は、日本の伝統的な「ジェンダー」の女性系様式と言えることは確かです。そして、「恋」との結びつきは古くから強く、「セクシャリティ（エロス）」を醸すことができる日本的な言語様式だったと言えます。ある種の淫らさやおぞましきさえ、和歌だからこそ、許容されるのかもしれませんが。そのような「セクシャリティ（性的情≒恋）」の要素が強い和歌全体を、与謝野晶子は「恋愛」としているのでしょう。

日本語における漢字熟語は、歴史的には

男性系言語の色彩が強いと言えます。二葉亭四迷は、文明開化とかで漢語を使うケースが増え、女性たちは意味が分からなくてぼやいていると書いています。漢語は、女性たちには馴染みが薄い語が多く、その意味では「恋愛」も、意味を特定できにくい単語の一つだった可能性が高いと言えます。

与謝野晶子が「恋愛」の語を知ったのは、幼年期からの膨大な読書量に負っていると考えられます。読書体験による「恋愛」が根底にあり、実体験は遅かったと書いています（「私の貞操観」1911年）。その上で、散文として綴った文章には、次のような恋愛観が示されています。

恋愛は全く自由である。そういう好悪の情や恋愛が自生するので、それに催されて処女が一生の協同生活の伴侶である良人（おっと）を選択する鋭敏なまた慎重な心の眼も開いて行く。

（「私の貞操観」より）

私たちの期待している新社会では、恋愛が結婚の基礎になりますから、恋愛の対象を発見しない限り生殖生活から遠ざかる男女を生じるのも当然です。しかし男女交際の自由な新社会では、恋愛の対象を慎重に選択する機会も多く、実際の生殖生活から遠ざかる男女は極めて少ないことであろうと想像します。

（「女らしさ」とは何か」より）

ここでの「恋愛」は、「結婚の基礎」とあるように、恋愛→結婚→出産という女性的な人生プロセスの最初にある「自由」な感情になります。この人生プロセスは与謝野晶子にとって、自身の経験からは当たり前のことです。娼婦的な心性や離婚する気持ちなどは、基本的には分からないとしてい

ます。その上で、ある異性への「好悪（好き嫌い）」から「恋愛」に至るような、「男女交際の自由な新社会」が望ましいとしています。そのためには、結婚前の若い女性への女子教育の充実、男性側の女性に対する偏見の解消といった、社会的課題の解決が必要だと説いています。この時代から1世紀以上を経た現在の日本でも、解決しているとは言えない課題です。

いずれにしても与謝野晶子における「恋愛」は、漱石が言う「遊戯」ではないし、鷗外が言う「性欲」ともちがひ、「美しい」と形容されるものでもありません。「感情」の一つのあり様のようなもので、そこでは美醜や愛憎さえない交ぜなのです。

次に取り上げるのは、岡本かの子（1889－1939）における「恋愛」です。その恋愛観は、『恋愛といふもの』という短いエッセーに著されています。恐らく、生前未公表の遺稿と思われます。

恋愛は詩、ロマンチックな詩、しかも決して非現実的な詩ではないのであります。**恋愛**にも種々あります、幼時の初恋、青年期中年期の恋、その何れもが大部分自分の意識する処は、詩的感激、ロマンチックな精神慾ではありますが、意識無意識にかゝらず、その底には厳として、肉体的意慾が横はり、それが流露を遂げさせんとする自然の意志が実に緊密に加勢せられてあります。ゆゑに、**恋愛**に於いて当事者の意識する処は大部分ロマンチックな詩的な精神的部分でありながら、実は人類の根本義に深く根ざし最も確実な現実性を有する最も現実的人生行路のところどころに置かれたる詩篇なのであります。

ここで示されている「恋愛」は、「ロマン

チック」なものです。それは、心身に根差した現実的な「精神（感情）」で、若い年代に限定されるものではないとしています。しかし、このエッセーの末尾で岡本かの子は、そう書いてはみたものの、と煩悶しています。つまり、「恋愛」という日本語に、「ロマンチック」のニュアンスを加味したいけれど、果たしてそれで良いのか、自分でも良く分からないとしているのです。岡本かの子の「恋愛」は、「恋愛」という字句に振り回されている感があり、同じ字句で振り回す側に立った与謝野晶子とは、対照的な印象を受けます。

現代日本語の「恋愛」には、日本語的解釈としての「ロマンチック」のニュアンスが生き続けています。というより、これまで見て来た作家たちによる「遊戯」「美しい」「若い時の感情（青春）」というニュアンスを、「恋愛」という日本語は、すべて兼ね備えているのです。そして、そのニュアンスのすべてが、性的心情に対応したものです。

●モードとしての「恋愛」



語は、ある意味では性的表現を逃れることができません。

それは、内発的な性的欲求や願望、あるいは、想念や意識を、時には対象者に伝える必要があり、言語は、その宿命を背負って使われ続けて来たからです。「恋愛」は、その性的表現を構成する近代日本語の一つです。

日本語の「恋愛」は、メディアを介して流通して来ました。戦時下の日本では、「恋愛」におもねる者は軟弱だとして、タブー視されたと言われています。「恋愛」は、罪悪感と強く結びついたので。戦後になると「恋愛」は、音楽シーンの一大素材になり、誘惑や挑発、その成就や破綻を歌ったヒット曲が、数多く生まれました。日本語

の音楽と言えば「恋」「愛」が定番と言える時代があり、その流れは今も続いています。つまり、「恋愛」は、文化的な一つのモードになったのです。そこでは、一人ひとりの事情など無視するように「恋愛」の歌が流れ続け、人々はそれを聴かされ、聴き入りました。そして、「恋愛」に「恋愛」するような意識状態を生んだのかもしれませんが。

「恋愛」は、前述したように英語“love”の対訳語を起源とした日本語です。しかし、“love”本体のすべてを意味する訳ではなく、その一部に対して「恋愛」の文字が当てられました。その一部とは、主に性的な心情や情動のことです。その心情や情動は、本来は実生活上の生身の個人に対するものです。しかし、古和語由来ではない「恋愛」は、リアリティが希薄な空想や妄想を生み、生活スタイルや行動パターンなどに影響を与える単語になりました。「恋愛」には、心理的な濃淡があります。継続する時間の長短があります。不定形かつ可変的で、時には制御不能です。そこには、社会的に許されない言動が含まれています。

フランスの著名な批評家ロラン・バルト (Roland Barthes 1915–80) は、「恋愛」に焦点を当てた『恋愛のディスクール・断章 (Fragments d'un discours amoureux)』という書物を著しています。ここで「恋愛の」としている“amoureux”は、“discours”にかかる形容詞で、ボクの手元のフランス語辞書では、「(～を) 愛した / (～に) ほれた / 恋の / ほれっぼい」などの意味です。以下は、その断章の一部です。

待ちつづけ、そのことで苦しんでいる男は、驚くほど女性的になるのだ。男が女性的になるのは、性的倒錯者だからではなく、恋をしているからである。

(「不在の人」より)

愛する人の身体が触れたものは、なにもかもその人の一部と化し、恋する者はそれに激しい愛着を感じる。

(「オブジェ」より)

このように「恋愛」は、日本語で言う「男らしさ」「女らしさ」という「セクシャリティ」を、メチャクチャにするような作用を含んでいます。事実、ここまでの検証で見て来た文献でも、「恋愛」に関する記述は、ある意味でメチャクチャです。何の前触れもなく胸がキュンとなったり、訳も分からず情感が溢れ出たりすることがあるのが「恋愛」ならば、それを理路整然と説明することは、ほぼ不可能です。

● 「恋愛」と「至福 (幸福)」



頭で述べたように「恋愛」は、極めて個人的な感情を表す日本語です。しかし、言語は必然的に、一定の社会性を持つため、「恋愛」という日本語は、相応の共有性を持つ単語として日本社会で機能しています。小学校レベルの日本語教育を受けていれば、単語としての「恋愛」は、ほとんどの日本人が知っていると思われます。

その「恋愛」は、「セクシャリティ (性的活動)」の一要素を表す日本語です。WHOの「セクシャリティ」の定義には、次のような一文があります。

「セクシャリティは、思考、空想、欲望、信念、態度、価値観、行動、実践、役割、人間関係によって経験され、体現される。

(Sexuality is experienced and expressed in thoughts, fantasies, desires, beliefs, attitudes, values, behaviours, practices, roles and relationships.)」

(Sexuality is experienced and expressed in thoughts, fantasies, desires, beliefs, attitudes, values, behaviours, practices, roles and relationships.)」

実際の「恋愛」は、それらの要素が複雑に絡み合いながら、内面的に経験されるの

でしょう。その「恋愛（恋をする）」は、基本的には対人的な感情である以上、感情としては個人的でも、さまざまな社会的要素に影響され、対象への言動を伴えば、その言動自体が否応なく社会的になります。

つまり、「恋愛」の実態は、思春期に体験することが多い初恋のような淡い恋心から、不倫と称される道徳的に問題視されがちなドロドロの情交、また、ストーカーや強姦、DV といった性犯罪になるようなおぞましい劣情まで、多岐にわたるのです。時には、「彼女はボクのモノ」「彼はワタシのモノ」的な所有観念と結びつき、「ヒトを所有物化はできない」にもかかわらず、かたくなな思い込みに陥ったりします。もちろん、与謝野晶子の言う「結婚の基礎」、夏目漱石の言う「遊戯（ゲーム）」、岡本かの子の言う「ロマンチック」、森鷗外の言う「美しさ」や「性欲」さえ、「恋愛」の一断面たり得るでしょう。第三者的に見て、そっと見守ってあげたい「恋愛」もあれば、厳しい目を向けざるを得ない「恋愛」もあるのです。

単語としての「恋愛」は、そのような複層した状態を表すために用いられます。異様な心の状態をも含むという意味では、その社会性において、善悪や美醜などの価値基準たり得ません。「恋愛」という単語で、社会的な“true or false（正誤／良否）”を説くことはできないのです。説けばどこかに矛盾が生じると言えます。それが、この単語が持つ特性の一つです。

現代日本語の「恋愛」が持つもう一つの特性は、文化的モード（意匠）のようなニュアンスがあることです。メディアを介して「恋愛」という単語に接し、そこに描かれた物語（フィクション）によって、「恋愛」を体験するという構図です。この場合の「恋愛」は、ある種の文化的価値（cultural values）であり、結果的にその志向性は時

代がかります。「恋愛」の形態やプロセスといった外面的要素に限らず、「恋愛」という日本語のニュアンスも時代性を帯びます。テレビで大ブームの恋愛ドラマとか、恋愛マンガや恋愛小説のストーリーとか、時にはドラマの演技者に恋するような文化性が、「恋愛」という単語を幻想（夢物語）化します。非日常性を盛った近代メディア文化という意味では、時代的な「対幻想」です。

恋愛感情と呼べる心の状態は、本来は時代性に関わりなく、人々の中で生まれ続けたと思われまます。「恋愛」中の心の状態自体が、時代によって様変わりした訳ではないのです。『ロミオとジュリエット』の恋愛感情と現代の恋愛感情が、心の状態として、全然ちがうとは言えません。ちがうとすれば、その心の状態を生む社会環境と、「恋愛」という単語自体の有効期間で、別のことばが有効になる可能性はあるでしょう。

いずれにしても、「恋愛」が成就したと思える時の感情は、やはり至福（幸福）です。人生における大きな喜びと言えるかもしれません。それが、一方的なものではなく、対象者と相互性がある至福（幸福）ならば、「恋愛」は、そこへと上る階段になります。

「恋愛」という日本語への感受性は、男性より女性の方が強い傾向にあると言われています。それは、自身の恋愛願望というより、「恋愛」という日本語が醸すイメージやニュアンスに、より敏感な傾向にあるからかもしれません。そのイメージやニュアンスは、多様なメディアを介して培われたのかもしれず、その意味では社会的です。「恋愛」という「セクシャリティ」に、メディアが強い影響力を持つ。それは、多様な「恋愛」の社会化であり、メディアの果たす役割が、「ジェンダー」の幸福に資することを願っています。

（2024年5月27日）

【出典及び参考文献】

- ・岩崎民平／小稲義男監修『新英和中辞典』（1977年、研究社）
- ・福井毅ほか編『ロワイヤル仏和中辞典』（1989年、旺文社）
- ・新村出編『広辞苑 第二版補訂版』（1982年11月、岩波書店）
- ・中田祝夫編『新選古語辞典 改訂新版』（1963年4月、小学館）
- ・水谷智洋編『改訂版 羅和辞典』（2009年3月、研究社）
- ・国立国語研究所 全文検索システム『ひまわり』文献データ
『明六雑誌』『国民之友』『女学雑誌』『女学世界』『婦人倶楽部』『青空文庫』
※文献データごとに「恋（戀）愛」で検索し、表示されたデータを検証した。『青空文庫』は、「恋（戀）愛」で表示されたデータに、著者名ごとに「透谷」「四迷」「子規」「漱石」「鷗外」「与謝野」「岡本」の文字を含むとしてフィルタリングを掛け、表示されたデータを検証した。
- ・飛田良文著「近代・現代の言葉の変化」（文化庁『「ことば」シリーズ 28「言葉の変化」』、1988年3月）※二葉亭四迷の明治期女性の漢語感覚
- ・ロラン・バルト著、三好郁郎訳『恋愛のディスコース・断章』（1981年9月、みすず書房）
- ・吉本隆明著『共同幻想論』（1974年4月、河出書房新社）※同書中の「対幻想論」の節
- ・シンキング・バーズ日本語研究班著『ジェンダーについて考える～身体的位相と社会的位相への眼差し～』（2021年5月、シンキング・バーズ）
- ・シンキング・バーズ日本語研究班著『ジェンダーについて考えるⅡ～その定義をめぐる検証と考察～』（2021年5月、シンキング・バーズ）
- ・シンキング・バーズ日本語研究班著『「セクシャリティ」を考える～その身体性と倫理性をめぐる～』（2021年11月、シンキング・バーズ）

シンキング・バーズ新書**「セクシャリティ」を考えるⅡ**

2021年12月1日（初版）発行

2024年5月27日（改訂2版）発行

著者：シンキング・バーズ

日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バーズ**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バーズに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。